

面に見る事が出来るなら、無常なものも亦常住なものに攝取されて来るのです。地に死ぬるとも天に活きるのです。なせなら彼岸が此岸よりも尙密に私達の生活に交つてゐるからです。

ノザアリスはこうも云ひました、「吾々は知見のものよりも、未見のものに、より多く關係する」と。見えない世界が見える世界よりも、より明かに見えない間、私達は神の神祕を味ふ事は出来ないのです。古人が穴なくして響き出づる笛の音に、耳をすませたと云ふ事を私は奥床しく感じてゐます。私達は見える世界や觸れ得る世界が最も確かなものだと思ふ事は出来ないのです。見えず觸れ得ない世界が却て凡てのものゝ基礎なのです。

神から離れるならば私の存在は許されてゐないのです。私は私の存在を自らに於て左右する事は出来ないのです。それは既に神の所有に依屬するのです。そうして此神への依屬に於てのみ、私と神との完き一が可能となつてくるのです。若しも私が神を私に結ぶのであるなら、こうして完き結合を保證する事が出来るでせう。「私が神に固く縋る事は常にいゝのです。なせなら、私が若し彼の裡に宿らないなら、私は私の裡にも宿る事が出来ないからです」、アウグステイヌスは敬虔な念をもつてこう書きました。又或個所では同じ意をこうも述べました、「されば吾が神よ、若しも御身が私の内に在さざりしならば、更に又私が御身の内に在らざりしなば、私は存在する

事が出来なかつたのです。全く存在する事が出来なかつたのです。萬物は御身より出で、萬物は御身に依り、萬物は御身の裡に在るのです。神が私達の存在を保證してゐないならば、私達は私達自身をすら保つ事が出来ないのです。併しもはや私達は私達自身をすら棄てる事が出来ないのです。なせなら神が固く私達を保留してゐるからです。私達は神自らの意志に呼ばれて、常に神と一體である命數を受けてゐるのです。私は次の傳大士の句を非常に美しいものだといつも想ひます。

「夜々佛を抱いて眠り、

朝々また還共に起く。

起座つゝ鎮つゝに相隨ひ、

語黙同じく居止す。

纖毫も相離れず、

身と影との如く相似たり。

佛の去處を識らんと欲せば

祇ただ這この語聲ななり」。

回教の詩人ハーラヂの次の句も私には忘れられないもの一つです。

「私は私が愛する彼なのです。そうして私が愛する彼は私なのです。」

吾々は一つの體に住むである二つの靈なのです。

若しも貴方が私を見てゐるなら、それは彼を見てゐるのです。そうして若し貴方が彼を見てゐるなら、貴方は吾々二人を見てゐるのです」。

「我と父とは一つなり」とイエスは云ひました。又「父我れにをり、我父にをる」とも云ひました。神と吾々を一如に於て觀じる時、凡ての思想はその頂に達するのです。佛徒は如何に「相即」の念を深く解し又慕つてゐたでせう。「即」と云ふ一字に凡ての哲學は集るのです。神と私と、云ふ對句を神は私に許してはゐないのです。「一即ち一切であり、一切即ち一」であること「信心銘」は歌ひました。

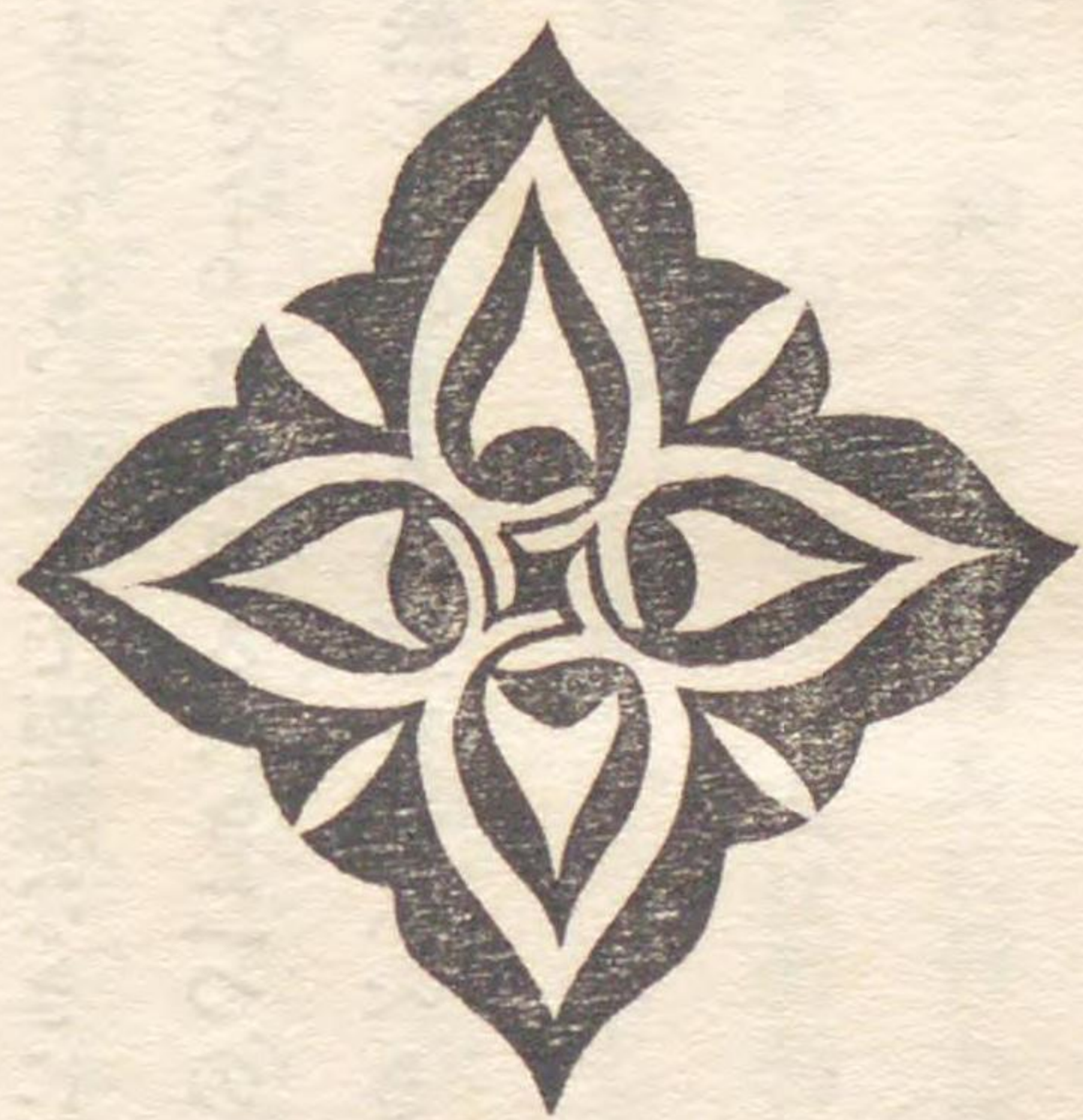
神は私達にこの一如の福祉を味はせようと希つてゐるのです。一に凡てが交る事に神の愛が注がれてゐるのです。私が神と一つとなる爲に、神は私と一つとなつてゐるのです。神はたえず彼自身を私に與へてゐるのです。既に私をして彼を離れる事を許さないのです。それが神の疲れる事のない望みであり、契ひであり、且つ又行ひなのです。私達と離れない事に神自身の生活があるのです。只私達が愚かである爲に、彼の盡きない此愛を知らずにあるだけなのです。彼がかほご迄に私を離さない事を意識せずに、私は彼と關係なき者の如くに暮してゐるのです。エックハルトはいつもの鋭さで書いてゐます「神は彼自身を吾々に與へるまで休む事はないのです……」

神は常に吾々と偕に居ようと熱中してゐるのです。そうして吾々さへ信するなら、彼自身を吾々に持ち來すのであると吾々に教へてゐるのです。神が人を彼自身に持ち來す事によつて、彼を知らしめようと求めてゐるほどに、人は何物をも熱心に求めてはゐないので。神は常に準備してゐます、併し吾々は準備してゐないので。神は吾々に近いのです、只吾々が彼から遠くにゐるのです。彼は内に在るのです、だが吾々が外に在るのです。神は家の中に居るので、併し吾々が見慣れの客となつてゐるのです。「神は彼自らを吾々と一つならしめんと急いでゐるのです」。

私はこゝに神と吾々との間に潜む深き關係を説いてきました。併

しそれは關係と云ふ様な言葉で言ひ現はさるべきであるよりも、寧ろ一體とこそ云ふべきなのです、私達はそれを最も近き距離に見出すと云ふよりも、進んで距離なきに、結合せられたる神と吾々を見出すのです。最早語るべき二つの問題が残されてゐないので。私も必然にこの便りの筆を洗ふべき終りに來たのです。

第七信 神の愛を救ひに就て





神の愛を救ひこに就て

之は今度私から貴方がたへお送りする終りの便りです。それ故私も凡ての神學の終りの章を形造る救濟の問題に就て、私に許されてある理解を述べようと思ひます。私は今吾等を愛し救ひ給ふ恩寵の神に、心を引かれて筆を執るのです。私は恐らく此便りに於て最も厚く神を想ひ慕ひつゝ筆を續ける事が出来るでせう。なせなら神を想ふ事は、神の愛を想ふ事に於て最も深い感激を受けるからです。そ

の時神は彼の高い御座を降りて私達の心を訪れて下さるからです。それは見えない神ではなくして私達に親しく語る神なのです。私達の爲に落涙し私達の爲に微笑し私達の爲に罪をさへ負ふて下さる神なのです。私はこゝに最も厚く人格としての神の温かさを見出す事が出来るでせう。併しかゝる彼の温かさをよく傳へ得る筆はないのです。若し愛としての又救ひ手としての神が、此便りによつてもう一度貴方がたに親しく意識せられるなら、それはもはや私の力ではないのです。此便りを出す私の事を想はずに私に力添へて下さる神の事を想ひめぐらして下さい。彼を慕ふ事は常にいゝのです。眞に慕はしきものは神のみなのです。彼より少しでも小さき者に私達は

私達の愛を費してはならないのです。私達は地上の多くのものを愛し戀します。併しかゝる愛が是認される場合があるならそれによつて神への愛がいや強まる場合に於てのみです。神への愛を奪ふ凡ての愛を私達は慎まねばなりません。更にこゝも云ひ得るでせう。彼を愛さずしては、正しく他のものを愛する事は出来ないのです。こゝに愛としての神を語るのは、神を愛したい心に依るのです。更に又彼の愛を悟りたい希ひに依るのです。此筆を續ける間、かゝる願ひが亂れない様にと、心のうちに念じてゐます。

神に於て思ふに
行ふことは
致す。

私はこゝに愛と云ふ字を、私が神を愛するその愛に用ゆべきではなく、神が私を愛するその愛に用ゆべきなのです。此字から呼び起される最も深き意味を尋ねようとするなら、私達は神の愛に行かなければなりません。彼の愛のほか誠の愛を見出し得る場合はないのです。私が如何に純に神を愛したとて、神が私を愛するその淨さを越える事は出来ないのです。而もヨハネが彼の書翰で云つた様に、私が神を愛するのは、神がまづ私を愛してゐるからです。私達に愛と云ふ事が許されるのは、それが神の愛を受けるからなのです。「吾れ愛す」と云ふ言葉は只神のみが正當に用ゐ得るのです。私は神の助なくしては正しく愛する事は出来ないのです。故に愛と云ふ字を

真に使ひ得るのは、只神の愛の場合に於てのみなのです。他の悉くの愛は全き愛とは云へないのです。全き愛、即ち神の愛とは何を意味するでせうか。私はこの事を解したいのです。

再び私達は神の愛を想ふに際して、私達の愛を通して考ふべきではないのです。人の愛がそこに交つてくるなら、どんなにか理解は不純にされるでせう。神の事は私を離れる事によつて見なければならぬのです。それで私は神の愛を味ふ爲に、問題を次の様に書き換へて尋ねる事が出来るでせう。

神的爱とは究竟的な愛との意を含みます。それ故私達は神の愛を正しく理解する爲に、それを究竟の相に於て觀じねばならないの

です。裏から云ふならばどこ迄も相對の義を離れて見ねばならないのです。それ故に先づ私達の愛を以てそれを測る事は出来ないのです。なせなら人間の愛はいつも二元の間に彷徨つてゐます。此世に於ける愛は反面に憎みを預想します。私達の愛は只憎愛の世界に在るのです。多く愛するものは屢々多く憎むのです。神の愛を想ふ者は、私達の愛によつてそれを判じてはならないのです。相對の義に陥るなら解し得る神の愛はないのです。それは私達の愛に例へ得るものでもなく、又並び得るものでもないのです。私達の強き愛も、彼の愛の前には力がないのです。

私達はこう考へなければなりません。彼の愛は究竟な愛なのです。

それ故そこには憎愛の二がないのです。憎みを反面に持つ愛ではないのです。彼の愛には對辭がないのです。憎みを許さざる愛なのです。愛それ自らに於ける愛なのです。私達の持ち得る愛ではないのです。如何なる事も彼に憎みの情を起さす事は出来ないのです。憎みを起させる程の力が此世にはないからです。彼を怒らせようとしても彼はそれを愛で受けて了ふのです。彼の愛を亂し得る程の人はないのです。彼は愛それ自身なのです。愛が神なのです。

憎む神と云ふ事を思つても、それは吾々の愛を通して見た神に過ぎないのです。神彼自らと、私達の見る神とを同じであると思ふのは誤りです。私達は憎悪と云ふ觀念を神の所有の中に見出す事は出

来ないのです。神は或者を好み或者を嫌ふと云ふ様な神學を、私は受け容れる事が出来ません。それは人間の相對な性情から作爲した考想到過ぎないのです。私達の不淨な心から判じる結果に過ぎないのです。單に私達が憎みなき愛を持つ事が出来ないのに起因してゐるのです。神の愛をかゝる弱さに於て思ふ事に私の心は堪へる事が出来ません。愛の神學はもつと究竟な無上な基礎の上に建つべきものだと私は思ひます。

神は愛なのです。愛が神なのです。愛とは彼に於てはそれ自らに於ける愛なのです。愛のほかは何ものをもその傍らに立つ事を許さないのです。全き愛なのです。充つる愛なのです。溢れ出づる愛な

のです。ごこに憎みを容れる餘地があるでせう。彼は愛し愛するのです。愛する事が、彼なのです。彼は愛自體です。彼が在つて愛すると云ふよりも、「愛する彼」があるのです。愛である彼には憎むと云ふ場所がなく暇がなく又性質がないのです。かく想ふ時、實に私達の目前に現はれる場面は一變します。私達自らも私達を圍む自然も、彼の愛から固く守られてゐる運命にあるのです。否、彼の愛からは決して脱れ得ない命數にあるのです。私は此奇しき事實を想ふて胸の躍るのを覺えます。

人は神に向つて愛を希願します、特に苦き時悲き時に彼の愛を頼み求めます。ですけれど神は人の求めを待つて人を愛するのではな

いのです。況んや求められるから愛するのではないのです。人が求めるよりも遙か先に、神は彼の愛をふり注いでゐるのです。否、彼の愛には時間もなく方處もないのです。彼は彼の愛を一度でも棄てた事がないのです。嘗て休めた事がなく未來にも休める事はないのです。否、彼の愛を求めない人にすら、彼は常に全き彼の愛を示してゐるのです。彼の愛は私達の態度によつて左右されるが如きものではないのです。

併し人は屢々詰問します。神がかくの如き深き愛であるなら、何故多くの人類は飢え苦み、破れ悲まねばならないのであるか。何故人は病ひに痛み死に惱まねばならないのであるか。どうして彼等の

悲嘆や彼等の苦痛をそのまゝに繰り返させつゝあるのであるか。神は人を愛し救ふと教へは云ふ。併し未だ嘗て人類の苦みは癒されず悲みは慰められてゐないではないか。それは私達が愛されてゐないと云ふ活きたしるではないか。

私は此苦い聲に向つてこう答へ得るでせう。それ等の悲みを彼の愛の薄さに歸す事は出来ないのです。それは長い間人類が神の愛を忘れた罪によるのです。今尙人は神の愛を離れて淺き愛や濃き憎みの間に彷徨ふからです。その苦みは人自らが産んだのです。産みつゝある罪なのです。神の愛の深きを忘れた罪であつて、彼の愛が淺いからではないのです。否、人類が今悲しい命數に泣くのを見れば

神は人を愛し救ふと教へは云ふ。併し未だ嘗て人類の苦みは癒されず悲みは慰められてゐないではないか。それは私達が愛されてゐないと云ふ活きたしるではないか。

こそ、神は彼の愛をいや強めてゐるのです。苦い出来事があるから神の愛が否まれるのではなく、却て強まつてゐるのを知るべきなのです。最も深く神の愛を意識する場合があれば、それは恐らく悲さや苦さに私達をもだえてゐる時です。かゝる経験のない人から神は却て見失はれてゐるのです。富んだ人で信仰に深い人は何處の國に於ても稀なのです。聖書が云ふ様に、心に貧き者や悲む者に、神は天國の喜びや慰めを約束してゐるのです。地上に於ては悲みや悦びがあるでせう。生や死があるでせう。併し未だ嘗て神の王國にかゝる變易はないのです。それ等の出来事の爲に、神が人類に用意してゐる全き愛に變りはないのです。地上に於て吾々がかゝる命數から

離脱し得ないからこそ、神は彼の愛に於て凡ての者の運命を守護してゐるのです。

私達は此世に於て苦み悶えます。その時私達は神の愛を見捨てようとしみます。彼を呪はふとさへします。併しそれは大きな誤りです。私達が苦むよりも前に神は私達の爲に自らの心を苦めてゐるのです。私達が淋しさの爲に涙にくれる時、神は更に多くの涙を私達の爲に流してゐるのです。私達が地上に於て不運な命數に逢へば逢ふほど、又かゝる命數から免かれ得ないからこそ、彼は私達をそのまゝの状態に於て救はふとします。彼は冷かな神ではないのです。温かき人格としての神なのです、親しく吾々に話しかけ吾々

を慰め吾々を勵まして下さる神なのです。此世に痛ましい事があるから彼の愛を疑ふべきではなく、いや深く彼の愛に信じ入るべきなのです。かゝる痛ましき出来事は私達の罪にこそ歸すべきものであつて、彼の罪に負はずべきものではないのです。全き神に一つの罪をも見出す事は出来ません。人は如何なる境遇に於ても神を讚美してゐるのです。そうして此讚美の心を一度固く捕へ得たら、吾々の環境は未だ嘗てない光景を開展するでせう。喜びも神への感謝であり悲みも神への感謝となるでせう。生に於ても人は神の愛を知り、死に於ても彼の愛を感じるでせう。なせなら如何なる時に於ても處に於ても人に對しても神は常に全き彼の愛を現はしてゐない事はな

いからです。過日私は十四世紀頃ドミニカンの僧が書き遺していつた草稿に、次の物語りがあるのを見出しました。或日御告げによつて或僧が會堂の入口に行つた時、一人の乞食に逢ひました。餘りに憐れな姿なので僧は憐みの心を感じ、その乞食の爲に神が幸ひや御救ひを與へるようにと祈つてやつたのです。併し乞食の答へは思ひがけないものでした。私には悪い日が一日だつてあつた事がなく、不運だつた事が一度だつてないと即座に答へるのです。僧はこの答への前にうろたへました。彼はその意味を話す様にと頼んだのです。乞食は喜んで次の如く答へたと記されてあります。

「貴方は私に好き日を望んで下さつた。併し私には一つの悪い日も

ないとお答へしました。なせなら私は飢える時でも神を讃えてゐます。寒くとも霰が降るとも又は雪や雨が降るとも又は空が晴れてゐる時も霧がある時も、私はいつも神を讃美してゐます。私から温くされやうが、嫌はれやうが私は等しく神を讃美します。それ故私は一日でも悪い日を持つた事がないのです。貴方は私に幸運が来る様にと祈つて下さつた。併し私には不運と云ふ事がないと貴方にお答へしました。なせなら私は神と一緒に暮してゐます。そうして彼が爲す凡ての事は最善なものであると確信してゐます。それ故に私に起る凡ての出来事が、悦ばしいものにして然らざるものにして、楽しくとも苦しくとも、それは神が私に

與へてくれる最上のものだとして受けてゐるのです。貴方は私に幸ひを希つて下さつた。併し私は不幸だつた事は嘗てないとお答へしました。なせなら私は一切の私の愛情を只神の御意にのみ注ぐ様に決心してゐるからです。それ故私は只神の欲する事のみを欲してゐるのです。

苦さに於て神を呪ふ者は、神の愛が何であるかを知らないのです。神の愛が何であるかを知つてゐる人は、此乞食の様に苦さの中に於て最も深く神を讃美するでせう。なせなら吾々の苦さによつて彼の愛の薄さを知り得るのではなく、却て厚さをこそ味ひ得るからです。此世の苦悶は彼の愛を疑はしむる何等の力ともならないので

す。却て固き神への信仰をこそその時見出し得るのです。悲みのない人は神を感じる事が最も薄い人なのです。

二

私は次に神の愛に包まるゝ吾々の命數に就て考へてゆきたく思ひます。吾々は常にはてしもない相對の波上に漂ふ身なのです。私達の心は時として高き愛の波に乗りますけれど、すぐ低き憎みの波に沈んでゆきます。而もその憎愛や好悪はそれ自身多寡の二に分れ、濃淡や淨穢の別を持つのです。それ故私達の神に對する心はいつも此二元の間を上下します。或者は神を濃く愛し或者は神を薄く愛し

ます。又同じ者でも或時は強く或時は弱く、或場合には多く或場合には少く愛するのです。時や處や個性の世界から吾々は越える事が出来ずにゐます。否、嘗に神への愛が有限であるのみならず、私達は屢々神を忘れてゐます。忘れるのみならず、愛さうとする志さへ持たず、進んでは彼を憎み嫌ひ、更に又彼を拒げ彼に逆らひ、遂には神を呪ひ彼を殺さうとさへするのです。

ですけれどもかゝる變易が神の愛には未だ嘗てあつた事がないのです。愛そのものである神は、愛のほかに彼の行ひを示す事はないのです。その愛は究竟な愛です。それ故如何に人類から彼が薄く愛せられ嫌はれ、又むごく取扱はれても、彼は未だ嘗て彼の愛を止め

た事がないのです。神には嘗て愛したとか、今だけ愛するとか、未來に愛するとか云ふ事がないのです。彼の愛に時間は入つて來ないので。同じ様に此處に於てとか彼處に於てとか云ふ限られた場所に彼の愛が集る事はないのです。彼の愛に向つて空間は一つの意味をも持たないのです、同じ様に或人を少く或人を多く愛すると云ふ事は決してないのです。彼の愛の眼の中に萬有はその差別を映す事が出來ないので。彼の愛は全き愛です。彼はその全き愛に於て一切を攝取するのです。

併しかく云ふ時或人はこう詰るかも知れません。かゝる愛は却て不公平な愛ではないか、なぜ神は正しき者に多くの愛を注ぎ、邪ま

な者に憎みを送らないのであるか。善き人と悪しき人とが共に神の寵兒であると、どうして云ひ得るであらうと。併しかゝる疑ひは神の愛の聖さを知らないから起るのです。人には善惡の差があるので。彼は賢愚の別から脱れる事が出來ないので。併し神の愛に二面はないのです。その愛は全き愛なのです。神はその愛を差別する事なく、差別せられた凡てのものを、全き彼の愛の内に攝取するのです。此世に於て差別せらるゝ凡ては、神に入る事に於て平等の幸ひを受けるのです。有限な吾々が此地上に於て差別の境遇を脱れ得ないからこそ、神はそれを差別のまゝに受け容れ、平等の温みに包むのです。人は神の差別なき境に於てのみ、差別の衣をぬぎ得るの

です。

私達は神を愛する資格を得る事によつて、神に愛されるのではないのです。若しそうなら誰が此世に於てかゝる全き資格を持ち得るでせう。想へば私達は神から愛される何等の資格もないのです。資格があると傲る人があつても、傲るその事が既に資格を持たない事を意味してゐます。誰も神の前に自らの正しさを全く主張する事は出来ないのです。若し正しき資格を持つが故に神から愛を受けるなら、地上から神の寵兒は永へに出ないかもしれないのです。神が私達に愛を注ぐのは、私達が自らに於て彼に愛さるゝ資格を得る事が出来ないからなのです。誰も神の愛なくしては神に愛される事はな

いのです。自らが愛される正しさを持つからではないのです。神に愛されると云ふ事は、神の行ひであつて、私の行ひに原因するものではないのです。愛は恵みなのです。私達自身にどうして愛される資格があり得るでせう。資格がなければ愛を受け得ないと云ふなら、私達は永へに神の愛に浴する事は出来ないでせう。

私達が正しいから愛されるのではないのです。又正しくないから愛されないでもないのです。愛すると云ふ事は神自らの意志なのです。私達の行爲の上下によつて左右する事は出来ないのです。人は自らを顧み愛されるだらうか、又は愛されないだらうかと云つて迷ひます。併し即刻に愛される資格がないのだと云ふ事を深く／＼

省みるべきなのです。どうしても自らに於てはその穢れをとる事が出来ないのだと悲み悲むべきなのです。併し同時に想ひ廻らして下さい。愛される資格は私達にないのですけれども、愛すと云ふ神の意志をそれによつて亂してはゐないのです。否、否、愛すと云ふ彼の無上な意志を破る資格も亦私達にはないのです。私はあの親鸞の驚くべき言葉を想ひ起さざるを得ません、「悪をも恐るべからず、彌陀の本願をさまざまぐる程の悪なきが故に」と。

之は驚くべき言ひ現はし方です。愛すと云ふ事が神の本願なのです。そうしてどんな力も之を破る事は出来ないのです。全く愛される資格のない私達の不浄な一生すらも、彼の愛の本願をさまざまぐる

力にはならないのです。私達は彼の愛から脱れる事は出来ないのです。資格があつて愛されるのでもなく、資格がないから嫌はれるのでもないのです。神が愛するから愛されるのです。無條件に愛されてゐるのです。愛は神のものであつて、私達が所有してゐるのではないのです。否、所有し得るものではないのです。そうして所有する事が出来ないからこそ、神はいや強く私達を愛して下さるのです。

私達は自身に於ては神の手を握る事は出来ないのです。ですから、私達が私の手を握つて下さるのです。それ故彼の手を離す事が出来ないのです。決して彼から離れる場合がないのです。彼が嘗て一度も私の手を手離した事がないからです。神と私達との愛は彼の愛で

あつて、私達の愛ではないのです。

私達はどうして屢々神を愛する事が出来ないのでせうか。それは私が愛さうとするからなのです。併し神の助けなくしては神を愛する事は出来ないのです。私達が神を愛し得るのも、神が私達を愛するのも、共に神の愛によるのです。私達が愛さうとするから、私達は神を愛する事が出来ないのです。

私達は神を忘れます、併し神は私達を忘れる事はないのです。時として神を私達は嫌ひます、併し神が私達を嫌ふ場合はないのです。彼を私達は屢々拒けます、併し拒けたと思つても彼は私達により近く接してくるのです。離れたい／＼と思つても、近づきたい／＼と

彼が想ふので、私達はどうする事も出来ないのです。彼がそれを只想つてゐるだけなら、實際に離れる事も出来るでせう。併し神に於ては思ふと云ふ事と行ふと云ふ事が同一なのです。離れたいと私が思つてゐる時、神は既に近づいて了つてゐるのです。私達が一步離れたと思ふ時、神は二歩近づいてゐるのです。それ故離れようとする行爲が、即座に神に近づく行爲となつて了ふのです。私達と神との距離より、より短いものはないのです。否、一すぢの溝すらないので。神は彼の愛によつて未だ嘗て私達を手離れた事がないのです。

エックハルトは短い言葉の中に、かいつまんでこう云ひました、

「神から脱れようとする者は只彼の胸に近づくに過ぎぬ。何となれば凡ての隅は神に向つて開いてゐる」。貞信と云ふ尼が三十一文字の中にこう歌ひました。「西へゆく御法をすて、東路へ、歸る我が身を迎へるとは」。私は過日「禪林類聚」卷の九に心を誘ふ次の物語を讀んだのです。

「昔、城東に一老母ありき。佛と同生して而も佛に見ゆるを欲せず。毎に佛の來るを見ては即ち廻避す。然もかくの如くなりと雖も、東西を回顧すれば總て皆これ佛なり。遂に手を以て面を掩ふ。十指の掌中に於ても亦總てこれ佛なり」。

かゝる句は私に深い眞理を示してくれました。何處にゆくも神が

私達を待つてゐてくれるその驚くべき事實を、この様に卒直に言ひ現はしてくれる句は、他に多くはないだらうと思ひます。

私が愛してゐない場合ですら、神が私を愛するのですから、私は彼の愛から脱れやうがないのです。私が斷はつても神は彼の愛を止めないので。いやだと云ふと、尙その愛を強めるのです。「畏るべき戀人」だと詩人トムスンと呼びました。貴方がたは彼の宗教詩「御天の獵犬」を讀んだ事がおありですか。驚くべき言葉の中に驚くべき此眞理が歌ひ出されてゐるのです。いくら逃げても、神は逃げるものを追かけて來るのです。ふりむくも彼がゐるし、前をむくも彼が待つてゐるのです。神は私達を戀してゐるのです。私達はた

えず戀されてゐるのです。彼の戀に固く捕へられてゐるのです。それなのに人は神を忘れるのです。彼に冷かなのです。彼を戀しないのです。神はきつと失戀の苦みを嘗めてをられるのです。淋しいにちがひないのです。彼には斷え間ない戀の悶えがあるのです。併し如何に淋しくとも苦しくとも彼はその戀を思ひ止る事は出來ないのです。絶えざる失戀によつて、彼は戀の焰をいや燃やしてゐるのです。

想ひみて下さい。私達は神の戀を受ける程の價はないのです。私達の心の顔は美しくないのです。それなのに神は私達を戀して下さい。それも並ならぬ戀なのです。それなのに私達は神を冷かに

に取り扱ふのです。私達は神の苦しさを察しなければならぬのです。そうして、もつたない私達の運命を想はなければならぬのです。

神は今や花嫁の装ひをして凡ての男の靈を訪れてゐます。そうして花聲の装ひをして凡ての女の靈を訪れてゐます。それなのに私達は私達の心を動かす事なく、それを冷かに見過ごしてゐます。併し嘗てソロモンが歌つた様に、神は凡てのものに言寄せて、「行いて我れ戀ひ惱む」と告げよと囁いてゐるのです。

而も神が人を戀する時、彼は彼の戀を貴方と他の人とに分けてゐるのではないのです。彼の凡ての愛を貴方に集めてゐるのです。貴

方がどの人であらうとも、貴方が神に戀されてゐるのです。ホイットマンが歌つた様に、神はこう貴方に告げてゐるのです、「愛する友よ、貴方が誰であらうとも、どうか此接吻を受けて下さい。私は特にそれを貴方に上げるのです。私を忘れないで下さい」。神が凡ての人を愛するとは、一人を愛すると云ふ事なのです。そうしてその一人は誰でもなく貴方と云ふ事なのです。その貴方が誰であらうとも、凡ての愛が貴方に注がれてゐるのです。

三

愛としての神への理解は、遂に御救ひとしての神への理解に私達

を進めてくれます。私はゆき互る神の愛に就て想ひ廻してゐたのです。戀によつて未だ嘗て私達を手離した事のない彼に就て心を躍らせてゐたのです。罪の暗きに沈む吾等に向つて、今やかゝる神は如何なる方として現はれ給ふでせうか。私は遂に救済の問題にまで導かれてきたのです。こゝに凡ての宗教はそれが教へ示す最後の眞理に來るのです。私達の靈は罪の苦惱を脱して、どうして救はれる事が出来るのであるか。神はこの事に向つて如何なる愛を吾々に示し給ふのであるか。救済は如何にして果されるのであるか。淨土は如何にして約束せられるのであるか。吾々はどうして天國に甦る事が出来るのであるか。宗教の終りの問題である此大きな如實な事項に

就て、觸れねばならぬ場合に私は到達したのです。

私は再び此問題を解くに當つて、それを私達の問題として取り扱ふべきではなく、直接神の問題の一つとして考ふべきであると思ふのです。私達は屢々こう尋ねます、救ひと云ふ事があるであらうか。どうしたら吾々は救はれるのであるか。果して救はれると云ふ事があるであらうか。救はれる爲にはどうしたらいいのであるか。若しや私達は救はれないのではあるまいか。救ひと云ふ事を私達の問題として考へる時、かゝる疑ひが次を追ふて現はれてきます。併し私達が一度それを神の問題として見る時、如何に異つた世界へと導かれてくるでせう。此問題を神の手から奪つて私達に於て考へるなら、

恐らく私達は望みなき暗黒の中に私達を葬らなければならぬでせう。私達は自ら罪を淨める事によつて此事を解決し得ると思ふかも知れません。併し私達自身で自身を全く淨め得ると誰が云ひ得るでせう。有限な吾々にかゝる力が許されてゐるでせうか。罪の問題を自ら解き得る程の力が吾々にあるでせうか。況んや自らを救ひ得る保證が吾々の手にあるでせうか。誰もそれを肯定しきる事は出来ないので。依然として私達は不淨な罪から助かるかどうかを自問しなければならぬのです。

問題は私達をしてその答へを神に委ぬべき事を求めてゐます。そうして満足なる答への密意が、彼の手にのみ握られてゐる事を感じ

ないわけにはゆきません。罪ある吾等が又罪なくしてごうして罪を取り除き得るでせう。罪やその赦しやその救ひは、私達が解き得るものでもなく、又解くべきものでもなく、只ひとり神のみが解いてくれる問題なのです。神を離れては何ものをも闡明する事が出来ないのです。神に歸るならば凡ては彼に於て解き得ることのみとなるでせう。神の問題と救済の問題とを分ける事は出来ないのです。

限なく愛し、全き愛を以て愛する神は、その愛に於て常に赦しを用意してゐます。そうして此事は神が凡ての罪を贖つて、人を救済し、その安息を準備してゐる事を意味するのです。愛は赦しの心であり、赦しは救ひの心です。そうして救ひは休らひの固い契ひなの

です。愛としての神は救ひ手としての神なのです。救ふと云ふことに神は彼自らの意味を深く見出してゐるのです。彼は救ふ神なのです。こゝに救ふと云ふ事が神の行ひであると云ふ事を忘れてはならないのです。それは究竟な救ひであつて、吾々が持つ救ひの力を之にたとへる事は出来ないのです。彼の救ひは無上であつて、救はないと云ふ様な場合を持たないのです。救ひ自らなのです。救ふと云ふその意志を何ものも枉げる事は出来ないのです。救つたとか、救ふかも知れないとか、救ふだらうとか云ふ意味がそこにはないので、彼の救ひは「永遠の今」に於て働いてゐるのです。救ひつゝある神なのです。

人は屢々果して救はれるか救はれまいかを訝ります。又救ひと云ふ事があるかどうかを疑ひます。併し救ひを約束する者は、神なのです、私達ではないのです。若しそれが私達の行ひに依存してゐるなら、誰も絶對な救濟を保證する事は出来ないので。況んや淨土を約束する事は出来ないので。併し私達にこの事を契ふ者は神なのです。救ひは救ひ自らである神による保證なのです。それはもはや私達によつて左右する事の出来ない力の示現なのです。

私達は嘗に自らに於て救ふ力がないと云ふ事を自覺すべきのみならず、更に救はれる資格があるから救はれるのではないと云ふ事を内省せねばなりません。神は資格を待つて救はふとするのではない

のです。又吾々に資格があるが故に救ふのでもないのです。更に又救ひを人から求めらるゝから救ふのでもないのです。救ふ神は處と時と人とを彼の救濟の預件とはしないのです。救ふその事が神の希願なのです。そうして神に於ける救濟の誓願は、直ちに衆生の救濟を意味するのです。如何なる人と雖も彼の救ひから見逃される事はないのです。而も凡ての時間が彼の救ひの心によつて満されてゐるのです。更に尙一切の場所が彼の救ひの中に横つてゐるのです。僅かの空間もそこから外に出されてはゐないのです。

神は未だ嘗て救はるべき資格を人に要求した事はないのです。又救はれたいと云ふ求めを待つてゐた事はないのです。又正しき者の

みを救はうとするのではないのです。凡てそれ等の事に依據する必要を待たず、彼は彼の救済の希願を残りなく果してゐるのです。救ひつゝある神の力によつて、凡てのものは救はれてゐる状態に在るのです。只吾々の信仰が乏しい爲に、此驚くべき出来事が、正しく認められてゐないに過ぎないのです。

私達は救はれようとしません。救はれたいとあせりません。併し自らに於てその事を計らふとするならそれは誤りです。救ひは神の御手にあるのであつて、私達のものではないのです。私達のものだと誤認する時、救ひ得る自分はないでせう。私達自らでは救ひ得ない故に、神は私達を救はうとする希望を尙強めてゐるのです。神を忘

れて自らを頼るものに向つて、光りはその輝きを匿して了ふでせう。

一蓮院と云ふ師が嘗てこう簡単に尋ねたと云ひます。「助かるつもりか、助けられるつもりか」と。こんな短い言葉の中に、よくも深い真理を煮つめたものだといつも想ひ廻らします。或日のこと貞信尼が同じ師に向つてこう尋ねたと云ひます。

「私の胸のうちは薄紙うすかみ一重がとれ兼ねてこまつてをります」。

師の仰せに、「誰でも、こゝまではやつと仕終せたが、こゝで薄紙一重がとれたならといつも思ふ。併しそれは思ひ違ひだ。助かる身になつて助かるのではない。助からぬものを如來様が助け

て下さるのだ」。

薄紙一重がこれ兼ねるのも、自らで取らうとするからです。それが取れきれないのも、取つたら神から愛されたいと思ふからです。自らで何事かをなし得ると思ふからです。神に頼る事が如何に正しい事であるかを知らないからです。助からぬものをこそ助けようとする彼の求めを思ひ當らないからです。

吾々の眼から見ると、或場合は救はるべきであり、或場合は救はれる筈がないと思へるでせう。併し神の心には「或場合」と云ふ様なものがないのです。罪ある者は自らを省みて、若しや救はれないのではあるまいかと危ぶむでせう。併し「若しや」と云ふ様な言

葉は神の字引にはないのです。神は彼の救済の本願に於て、何等の條件にも依據する事がありません。条件によるが如きものが、彼の本願となる謂はれがないのです。

神はその救はうとする意志に對して、吾々の状態が如何なるものであるかに躊躇しないのです。凡ての人類をあるがまゝの状態に於て、彼の救ひの心に攝取するのです。私達にとつては救はれないと云ふ事の方が不可能なのです。そうして一切のものゝ救済は神の御意によつて動かす事の出来ない事實となつてゐるのです。もうこの幸ひな神の約束を破る事は出来ないのです。どうしても出来ないのです。

前に書いた同じ一蓮院師の言葉の中に、こう云ふ事があつたと傳へられてゐます、「若し佛様が吾々にどうにかなつて救はれる様にせよと仰せられたら、どうにもなられませぬと云つて佛様から逃れる事も出来やうが、その儘でいゝと仰せられるので逃げやうはないではないか」。教へがこゝまで来る時、私達にはもはや云ふべき事も残つてゐないので。このまゝにして神の限りなき御恵に受けとられてゆく命數を想ひ、もはや感謝のほか何ももない様に思ひます。もう一つ私は此驚くべき師一蓮の言葉を引用しませう。或折弟子であつた貞信尼がこう尋ねたのです、「ひよつとして地獄に落ちましたらどう致しませう」。その時の師の仰せに「ひよつと所ではない、

必ず落ちる者を如來様が必ず助けてやらうと仰せられてゐるのだ」。神はたへずこう囁いてゐるのです。私に救はせてくれ、お前が救はれる幸ひを私に委せてくれお前に救はれる資格を得よと求めはしない。それはお前にとつては無理なのだ。それだから私に救はせてくれ。そのまゝでいゝのだ。安心して私の胸に頼つてくれ。救ひたい、と想ふこの心が、お前に通じてくれる事を念じてゐる。神はきつとこう私達に話しかけてゐるのです。

四

聖書に記された數多い物語の中で「放蕩息子」の話は、私にいつ

も忘れられないもの、一つです。罪の子に對する親の愛が、胸に迫る様に響いてきます。就中そこに記された教へよりも、次の様な言葉に私の心が動されてゐます、「なほ遠く隔りたるに、父これを見て憫み、走りゆき、其の頸を抱きて接吻せり」。「なほ遠く隔りたるに……走りゆき」、私は思はずも涙に誘はれてゐます。神の愛を身にしみて味ひぬいてゐたイエスの口からこそ、生れ出た言葉だといつても思ふのです。

私達が罪に泣くよりも先に、神はもう私達を抱て涙にぬれてをられるのです。私達が神に近づくよりも前に、神はもう私達へ走り奇つて私達に口吻してゐるのです。遠くに隔つてゐればゐる程、彼は

私達の側を離れじと念じてをられるのです。私達からはまだ見えな程の遠くに神が離れてゐても、神はいつも彼の目の前に私達をつれてきてゐるのです。片輪の子は、いつも親にとつてはいとし子である云はれます。「盗みする吾が子が憎うなうて、繩かける人がうらめし」と人情は告げてゐます。況んや神はどれ程に罪ある者の爲に彼の愛を強く注いでゐるでせう。彼の愛は憎む事を知らない愛なのです。彼の赦しは咎める事のない赦しなのです。彼の救ひは陷る事を許さぬ救ひなのです。一切は彼に於て救はれてゐるのです。神とは救主としての神なのです。如何なる罪も彼の赦しの心に躡らひを起さす事はないのです。それを疑ふのは、神の愛を私達の愛から

考へるからなのです。

罪への容赦は神に於ては即刻なのです。そこには時間さへないのです。而も罪の軽重にすら動かされてゐないのです。否、罪が重ければ重いほど、神は全き憫みと赦しの心とを彼等に送るのです。送る事を忘れる場合がないのです。彼は彼の愛に於てそれを契つてゐるのです。私はこゝに有名な親鸞の言葉を思ひ出さざるを得ません。「善人なほもて往生を遂ぐ、況んや悪人に於てをや」。これ程大膽な而もこれ程眞實な言葉があり得るでせうか。之は最も高い宗教書の中に金の文字で記さるべき言葉です。

神は實に此救済の發願を果す爲に、自らをさへ犠牲にする事を踏

はないのです。血を流す事をさへ惜しまないのです。神は凡ての者に自らの死をさへ用意してゐるのです。凡ての殉教者の一生には神の血が交つてゐるのです。私は神が彼の一人子を十字架につけて、人類の罪を贖はうとしたと云ふ教へに、動かす事の出来ない眞理を感じてゐます。罪から脱れ得ない吾等であるから、神は常にその罪を贖ひ給ふのです。吾れ等を浄めようとする本願のために、神は彼の淨き身に凡ての罪を背負はふとしてゐるのです。神は吾れ等を活かさんが爲に、吾等の中にたえず死んでをられるのです。イエスの死はそのまがふ事のない現れなのです。吾等を救ふ爲には神は彼の死を恐れてはゐないのです。救主としての神は贖罪としての神なの

です。若しも神が罪を負つてくれないなら、人類は暗き地獄に永へな呻きを重ねなければなりません。そうしてこの苦みを想へばこそ、神は私達に救ひを契つて下さつたのです。今も契つてをられるのです。未來もこの契ひに變りはないのです。

神のかゝる限りなき愛に攝取されてゐるその世界を、私達は淨土と呼び天國と呼ぶのです。人は天國の有無に今尙思ひ迷ひます。併しそれは私達が地上に於て判いてゐるからなのです。地上に於ける私達は天國の存在を約束する事は出来ないのです。私達がそこに徴しるしを求めたり證あかしを求めたりする事はどうしても出来ないのです。天國は私達のものではないのです。淨土は神の國なのです。神に歸らす

してはその意味を解く事は出来ないのです。私達の立場から見ると故に、それは解き得ない謎となるのです。併しそれは私達の知解の中に入り来る何ものでもないのです。それは神のものなのです。それ故神の理解に凡てを委ねなければなりません。私は天國を約束する事は出来ないのです。併し神が私に約束してゐるのです。私が説くものなら疑ふ事も出来るでせう。併し神の契ふものを疑ふ事は出来ないのです。よし吾々が疑つたとしても、天國は疑ひ得る何ものでもないのです。疑ふ事によつて左右せらるゝが如きものではないのです。それは裏切る事を知らない神からの固い契約なのです。そうしてその契約を破り得る程の力は此世に一つだにないのです。

如何に不淨なものも、天國の淨さを穢す程汚れてはゐらないのです。究竟な悪はないのです。究竟と云ふ事は只神の世に於てのみ許されてゐる事なのです。

神は今凡ての者を彼の愛に於て受けてゐるのです。凡てを赦し凡てを救ひ、罪を贖ひ安らひを與へ、一切のものを彼の温い膝の上に包容してゐるのです。私達は今地上に在ると云ひます。併し確かな言ひ方を以て、より多く今天國に居るのだと云ふ事が出来るのです。私達と淨土との關係は、私達と現世との關係よりも、遙かに密に結ばれてゐます。私達は此岸に居ると云ふよりも、この此岸が既に彼岸の中に包まれてゐるのだと云ひ得るのです。地と天とは遼遠な間

隔の端に置かれてゐるのではないのです。地はどうしても天から離れられない命數のうちに安在してゐるのです。凡ての宗教は天國の福音を語るべき宗教でなければならぬのです。この事が私の知識によるならば貴方がたは疑つて下さつてもいゝのです。ですけれど天國を約束してゐるものは神なのです。私ではないのです。貴方がたも又私も、此眞理を疑ふ何等の權利をも持つてゐないのです。神が私達を淨土に保留してゐるのです。決して手離した事がないのです。離れようと思つても神様は許して下さいません。どうして私達は淨土に居ないと云ひ切る事が出来るのですか。そう云はうとしても、神様はもう私達を抱き、熱い口吻を以て私達の唇を封じてゐる

のです。

凡ての者は神のいとし子です。私達はいつも神の膝の上に抱き上げられてゐるのです。その場所より安全な場所はないのです。そこは安息の膝なのです、佛者が云つた様に「安心」の境なのです。安心が佛心なのです。アウグテスイヌスが記した様に、吾々の心は神を離れては憩ひの枕を持たないのです。神は彼の膝の上に、人類の平和と安息とを永へに約束してゐるのです。

それ故愛も赦しも贖ひも救ひも又安らひも、純に神からの恵みなのです。賜物なのです。吾々はそれ等のものを受けるに足りないのです。足りないからこそ神は彼の恵みを注ぐ心をいや強くしてゐるの

です。神は恩寵の神なのです。正しき行ひの故に私可愛さるゝのではないのです。況んや悪しき行ひの故に愛さるゝのではないのです。私達の行ひから愛が導き出されるのではないのです。それは凡て神からふり注がるゝ贈物なのです。彼は愛を贈る事によつて凡てを救はうとする誓ひを立てゝゐるのです。吾々を救ふと云ふ事が、神が神自らを成就する事なのです、彼は正しき者を救ふのです。況んや悪しき者を救ふのです。救ひは常に神の御手にあつて私達の手にはないのです。それ故にこそ救ひが全ふせられるのです。赦しや救ひが若し恵みでなかつたら、私達は永劫に苦界のうちに彷徨ふでせう。救済は神から人間へ與へらるゝ恩寵です。救ひに於て神は自らを人

間に啓示するのです。神は狭き吾等の胸をも、その愛する訪れの場所となし給ふのです。

此祝福せられた命数は、私達に如何なる心を誘ふでせう。私達にはもはや神への感謝と神への讃美のほか何ももないのです。嬉しさとは有難さが心にこみ上げてくるのです。あの善男善女の口から洩れる「有難い」、「もつたない」と云ふ聲の中に、私達の最後の心が示し出されてゐるのです。或僧が信仰の生活を顧みて、「うれし、はづかし」であると言つたと云ひます。此二言の懷述は、眞にゆかしい響きを包んでゐます。

救はるべき身であらざるに、救はれてゐる身となつてゐるのを想

ふ時、嬉しさと、恥しさと、そうして勿體なさが私の心に漲つてきます。捧げ得る神への言葉があるなら、それはもはや希願の祈りではなくして、讃美と感謝との祈りのみであると云はねばなりません。神の前にぬかづいて禮拜する姿は、此世に於ける最も美しい姿なのです。私達の一生は神への絶えざる禮讃でなければならぬのです。

私はこゝに是等の長き音信の終りに來ました。私にも又神への讃歌のほか、もはや綴るべき言葉が残つてゐないのです。

限りなきかな、神の飽く事なき愛。

彼のゆきわたる愛から脱れ得ない吾等の運命。裏切る事のないその戀人から、絶えざる接吻くちづけを受くる吾等の一生。値なきに神の値を受くる吾等の命數。罪の重荷を吾等からとりて、自らに背負ひ給ふ彼の贖ひ。赦されざるべきに、赦しを契ひ給ふ神の御赦。救はるゝ身に非るに、常に救はれつゝある吾等の生命。遠く離さかりぬるに、離さじと抱からるゝ吾等の肉體。苦界に沈むべき者を、安息の枕に休ましめ給ふ彼の惠。地に朽つべき者を、天に於て受け取り給ふ彼の慈念。そも何が故に神はかく迄に、ふつゝかなる吾等をいとも愛し給ふや。

驚くべきかな、神の測り難き御業。

吾等よりも尙吾等に近き神の御座。見ゆるものよりも、更に明るき彼の見えざる姿。吾等をして彼とならしめん爲に、まづ吾等となり給ひし彼。彼より出でし子を彼に歸らしめんとて、設け給ひし圓輪の旅路。彼より離るゝ門を、常に彼に入る門となし給ひし彼の御意。彼が自らを出づる扉と、彼が吾等に入る扉とを一つになし給ひし彼の氣遣ひ。「神よ」と云ふ吾が聲を、直ちに「吾れなり」と云ふ彼の聲に響かせ給ふ彼の密意。おゝ、何が故に神はかくも厚く、吾等の爲に是等の祕義を示し給ふや。

賞むべきかな、凡てを正しく準備し給ふ神の配慮。

限りなく遠くに在し、而も限りなく近くに在す彼。何處にも無く

して而も何處にも在る彼の住家。吾等を越ゆる事によつて、常に吾等に降り給ふ彼。自らを分つ事なく、而も個々のものに全き彼を現はし給ふ彼の姿。彼を現はす事なくしては、現はるゝ事なき彼の事物。彼に想はるゝ事なくしては、創らるゝ事を許されざりし凡ての自然。彼の王國から永へに外に出づることなき宇宙の運命。神は如何なればかくも深き攝理に於て萬物を創り給ひしにや。

讃ゆべきかな、神の畏るべき叡智。

明かなるものをも尙暗からしむる彼の明るさ。否まるゝとも、否まるゝものゝ何處にもなき彼の確かさ。理由なきに並びなき理由を含ましむる彼。自ら證する事によつて、凡ての證を待たざる彼。一

つの知もなき信に於て、全き知を得させ給ふ彼。彼への全き服従に於て、吾れに全き自由を贈り給ふ彼。吾れを彼に失はしむる事に於て、彼に吾れを活かしめ給ふ彼。そも如何なれば神は、かくも不思議なる能を吾等に現はし給ふや。

妙えなるかな、神の神祕。

糸なきに美しく奏で出づる神の琴の音。水なきに濡るゝ彼の潤ひ。永へに輝き渡る彼の聖暗。言葉なきに言葉を語る彼の沈黙。實に在つて實に在らず、空に還つて空に止らず。爲すなくして凡てを爲し、知らるゝ事なくして凡てを知らず。一たるによつて一を要せず、二に在つて二に亂されず。名なきに於て名を止め、動く事なくして常

に動く。そも神は如何なればかくも豊かに、匿れたる智慧を吾等の前に啓き給ふや。

美しきかな、神によつて果さるゝ行ひ。

凡ての吾が問ひを、問ひなき境に於て答へ給ふ。知らるゝことを待たづして、彼そのものを吾に示し給ふ。彼を吾が思想に入れずして、彼の中に吾が思想を見出させ給ふ。限りなく吾が知識を棄てしめ、限りなき彼の智慧を得させ給ふ。彼は吾が口を閉ぢる事によつて、彼の口によつて吾れに語らせ給ふ。彼れは吾れの餘すなき否定と、彼の残りなき肯定とを固く結ばせ給ふ。彼は彼に死す吾れを、彼に於て活かしめ給ふ。而も是等のことを吾等に委ねず、凡てを彼

に於て計らひ給ふ。そも如何なれば彼はかくまでに、休む事なく彼自らを吾等にふり注ぎ給ふや。

あゝ感謝すべきかな、彼の慈み。

彼は吾等の爲に常に彼を犠牲にし給ふ。彼は彼自らを棄つる事によつて、吾れを活かしめ給ふ。あゝ、吾等が神に死すと思ひしは、神が吾等の爲に死に給ふたのである。吾等が彼に活かしと思ひしは、彼が吾等に活き給ふたのである。おゝ、彼の朽ちざる生命に支へらるゝ吾等の朽ちざる生命。吾等の爲に計らひ給ひし彼の驚くべき是等の企て。

神よ。御身に感謝す。御身の一人の僕より、捧げまつる是等の讚美と、是等の感謝との足らざる言葉が、再び御身の御恵に於て、御身に受け容れらるゝ事を。希くは御意に適へる日、更に多くの匿れたる驚異を、吾れに示す事を許し給へ。更に尙御心に添ふならば、それ等の驚異を、再び讚美と感謝との言葉に於て、綴る事を吾れに許し給へ。

索引

アブラハム (Abraham)	三三七	「荒野」	一七二-一七四
アダム (Adam)	八六	Asceticism 苦行を見よ	
Agnosticism 不可知論を見よ		アシシ (Assisi)	三三三
愛	三三三-八、三六八、四〇〇-一	Atheism 無神論を見よ	
アルベルト・マグヌス (Albertus Magnus)	三三三	アテネ (Athens)	三三
アキノナス (Aquinas, St. Thomas)	八一	Attributes 屬性を見よ	
アラール (Allah)	三六八	アウグスティヌス (Augustinus)	一四二、一四三、一四四、一四七、一四八、一五〇、一五一、一五三
Ancoren Rivle' 「尼僧清規」を見よ	七二、七三-七五		
「暗黒」	四三六	B	
安心		馬祖道一	一四四
「暗夜」	一七〇-一	ベーム (Jacob Böhme)	一五〇
A prior	一四〇、一四一	ベタニヤ (Bethany)	一五

ベツレハム (Bethlehem)	三四七	直観	五三、一〇三
ブレーク (Blake)	一七五、三四三、三六二	超神論	二七六、二八六
佛陀	九四、二二七	趙州	一八六
佛性	三三六、一七	「中」	一八八
佛心	三三二	「中論」	七五
「物神論」	二七〇	Cloud of Unknowing 「不知の雲」を見よ	
佛徒	七三、七三、九六、一〇二、一一五、一五九、 一六四、一七六、一九一、二七二、四三三	Contemplation 「靜慮」を見よ	
		Crashaw クラシヨーを見よ	
C			
知(知識)	六五、一八、八〇、一一二、三三三、三三八	大乘	七五
沈黙	八三、九一、一八、二三四	達磨	六五
知識と信仰	二一〇、一六、三三三、一四四	ダビデ (David)	一三三
「知的愛」	五三	Dedication 神格化を見よ	
超越	二七三、二六〇、二六六、一八、二九六、一七	Deism 超神論を見よ	
超越神 神の超越性を見よ		デカルト (Descartes)	二四、三九、三六
D			
懷讓	一〇〇		
「易」	一九二		
圓	三六一、一四、四一		
エリゲナ (Erigena, Scotus)	一八、一、九、三三、三二、二九、五		
エルサレム	六、一、三、三三		
Exodus 「出埃及記」を見よ			
E			
「慧」	五三、八五		
エックハルト (Eckhart)	五三、九六、一三三、一三四、一七三、一八六、 二二二、二四九、三三六、三三九、三四〇、三四四、 三四七、三六一、三六九、三七〇、三七七、四〇九		
洞山	三三二		
「永遠の今」 (Eternal Now)	一三三、四一九		
「永遠の相」	一三〇、一四四、一六一		

ディオニシウス・アレオパジテ (Dionysius Areopagite)	四四、一六、一七〇	懷讓	一〇〇
「獨」	一八五	「易」	一九二
ドミニカン (Dominican)	五七、七	圓	三六一、一四、四一
「道德經」	二六〇	エリゲナ (Erigena, Scotus)	一八、一、九、三三、三二、二九、五
洞山	九三	エルサレム	六、一、三、三三
E			
「慧」	五三、八五	Exodus 「出埃及記」を見よ	
エックハルト (Eckhart)	五三、九六、一三三、一三四、一七三、一八六、 二二二、二四九、三三六、三三九、三四〇、三四四、 三四七、三六一、三六九、三七〇、三七七、四〇九	F	
洞山	三三二	Fetishism 物神論を見よ	
「永遠の今」 (Eternal Now)	一三三、四一九	フランチェスコ (Francesco, St.)	三三三
「永遠の相」	一三〇、一四四、一六一	「不」	七四、八三、一四七、二五一
		「不知の雲」	六四、八〇、一七一
		傅大士	三三七、三七四
		フーゴ	七六、三三三
		「不言之教」	九二

「不二」 五五、一七六—七
 不可知論 六六
 不死 三三
 「不思議」 一六四、一七六
 G
 藝術 六三
 「支」 一六
 Giotto シオットを見よ 一六
 Gnosis 三三
 Godhead 神性を見よ 三三
 權化 三三
 合理論 (Rationalism) 四〇
 H
 「八不」 五五
 五五、一七六—七 白隠禪師 一八三
 六六 白光 二五五—六
 三三 判斷 三三
 般若 二四四
 沉論理主義 二七七
 沉神論 二五、二八七、二九六
 ハラーヂ (Hallaj) 三三五
 悲哀 二四一、三九二—四〇〇
 「火花」 三三五
 ヒルトン (Hilton) 一七四、一九六
 非思量 七三
 否定道 六二、七三—八四、一〇九、一三二
 ホイツトマン 二九五、四一四
 「放蕩息子」 四二七
 ホセア (Hosea) 一七三

「The Hound of Heaven」 御天の獵犬を見よ 四三三、四三六
 Hugo of St. Victor ノーユーを見よ 三〇六
 I
 イブン (Ibn al Arabi) 二一九
 「一」 四七、四八、六二、一八五—
 「一物不將來」 一八六
 一律 一八一—七
 「イデア」の世界 二九四
 イエス 一八九、一九五、一九七、一九九、二五七、二五九、
 三〇〇、一七四、一九〇、二二五、二六二、二七、
 三三、三四、三七、三三、三三、三四—
 五、三三、三三、三六、四六、四三
 二六八—九
 三四
 意味の世界 二六八—九
 イムマヌエル (Immanuel) 三四
 Intellectualism 主知主義を見よ 四三三、四三六
 一蓮院 三〇六
 一神論 三〇六
 瀧仰宗 三三三
 J
 ジャラルディン (Jalaluddin Rumi) 三三六
 Jerusalem エレサレムを見よ 三三六
 Jesus イエスを見よ 三三三
 地獄 三三三
 自己(自我) 六六、三三—四、三四—二
 自明 一〇四—七
 人性 三三六、三五〇
 自律 二〇四、二二九
 自性 三三六
 自證 二二五、二〇一—四、三九—四一、四二

52

實證主義	一五八	カビール (Kabir)	一八三、二六五
自體	二七—二四	鏡	二六四
自體の承認	一三六	戒	八五、九〇
自由	三二—三、四三	客觀性	三—四、三六—四二、三六、三三八
定	八五、九八	神への愛	三〇、三二—三五、八
淨土	三三—三、四三—五	神への服従	三〇—三、四三
Joseph ヨセフを見よ		神への保證	一五、三三、二四—八、二五、一〇〇—一
「淨心鏡」	九	神への感謝	四三—九
シオット	三三	神への歸入	一〇四、一〇六、一〇九、一一一
「十牛圖」	一八七	神への懷疑	一一五、七
十字の聖ヨハネ (John of the Cross, St.)	八一—七〇	神への求め	七—八、三六—九、三九—二
ジュリアン (Julian of Norwich)	三三—三、四三—五	神への理解	六—二、三三
通還論證	二四、二七	神への讚美	四三—九、四三—四四、五、九—二七、九—三三、四〇—六、五〇、一四五
		神への問ひ	

K

神自體	二七—四、二五	神の神祕	一六三—一九四
神の愛	三九、三三—四四、四〇	神の徴 (Sign)	一四、二二、二五—八
神の現れ	二四—三、四—四三	神の存在	一三—四、二〇、二五—七
神の智慧	五六、一五、一六、一六三、一六六	神の救し	四—八、四七—三〇、四〇
神の超越性	二五〇、二七〇—八〇、二八六—九、二九六	神と理由	二〇七—一六
神の人格	三七、三八四、三九五	神と吾々	三五—七九
神の自存	一五—一七	悲み	八九
神の住所	一五九、四三	鑑智禪師	五六
神の啓示	三〇—一、二五〇、二六九、二九七、三四〇	感情	一〇三、二九
神の子	三四五—六	カント (Kant)	二九、一四一、一三七
神の究竟性	四六、二九	カータ奥義書 (Katha Upanishad)	一九一
神の觀念	六九—七一	カタリナ (Catherine of Siena)	三三
神の内存在	二五〇、二七六—八〇、二八六—八、二九七	權威	二一八—二二〇
神の恩寵	三九、三三、三三三、三三七	見性	三四
神の性質	二—三、二〇、七〇、一四七—一四九	歸依	三〇—一、三三

52

禁慾 二九六
 「既成自然」 二九七
 金剛經 九三
 個性 三三六
 孔子 九二
 言葉 三三三
 「空」 三三、八三、九一、一〇四
 クエーカー 三三、七五、六三、五二、四一、三〇
 苦行 九〇、九一
 「空觀」 七三、八〇
 クラシヨウ (Crashaw) 三三
 クリスト (Christ) 三三、四一、八
 救濟 三三、三三、四一、四一、六、
 四一、八、一七、四一、七、四〇
 クザーヌス 七三

懷疑論 二九六
 科學對宗教 二九七
 悔恨 九三
 救主 三三六
 L
 Logos ロゴスを見よ
 Luther ルーテルを見よ
 M
 摩拳羅 一八〇
 マルタ (Martha) 九五、九六
 マリア (Mary) 九六
 マリア (Mary, the Virgin) 三三、三三、
 迷信 三三、三三、
 メッシヤ (Messiah) 三三、三三、

未 一八、三三
 見ゆる神 一五、三三
 未發 一八、三三、三三
 「民數紀略」 三三
 'Mirror of Simple Soul' 「淨心鏡」を見よ 一八、三三
 未生(未分) 一八、三三
 「未成自然」 三三
 「御天の獵犬」 四一
 「文字を立てず」 三三
 文珠 三三
 目的 三三
 モリノ (Molino, Miguel) 八四
 Monotheism 一神論を見よ 一三、一六
 モーゼ 一三、一三
 無 三三、三三

無爲 一八、三三
 無條件なる承認 三三、三三、
 無住心 一五
 無住所 一五
 「無名」 三三、三三、
 無心 三三、三三、
 無神論 一七、
 「妙」 一六
 N
 内在 三三、三三、
 「汝自身を知れ」 三三、三三、
 南泉 三三、三三、
 Naturalism 自然主義を見よ 三三、
 Natura naturans 「未成自然」を見よ 三三、

52

Natura naturata 「既成自然」を見よ
 ナザレ (Nazareth) 三四七
 ニュートン (Newton) 一五九
 Nicholas Cusanus クザーヌスを見よ
 ニの世界 三〇—八、八七
 認識論 六、二五、二六、三九、三九、二四
 「尼僧清規」 九五
 ノヴァリス (Novalis) 三六、三三、三三
 「如」 一〇〇—一
 O
 奥義書 一九二
 嬰兒 二五—六
 P
 Pantheism 汎神論を見よ
 パスカル (Pascal) 三六七

パウロ (Paul) 五六、六四、一〇七、一三二、一三三、一三三、一三九、二二一、三三〇、三三〇
 プラトーン (Platon) 八、二九四、三三三
 プロティヌス (Plotinus) 四、一八四、一八六
 Polytheism 多神論を見よ
 Positivism 實證主義を見よ
 Prodigal Son 放蕩息子を見よ
 Psalms 詩篇を見よ
 Q
 Quaker クエーカーを見よ
 R
 ラビア (Rabbia) 一四六
 樂天 二七二
 「靈智」 五三
 理知 五三—三、三六—八

理性 三三六、三四五
 ロゴス 三四一
 ロール (Rolle, Richard) 一七三
 論理の法則 三三—六
 論理性 三三、三五、三三六
 老子 九二、一六九、二五九
 論理的知識 五三、三六
 ルイスブレーク (Ruyssbroeck) 九二
 ルーテル 二二〇
 楞伽經 五五、九四
 龍樹 七五
 S
 差別と同一 二八〇—五
 三學 五三、八五
 聖暗 一六—七

聖者 九〇
 靜慮 九八
 先驗 一四〇
 シェリー (Shelley) 二六五
 「思慕の説」 (Doctrine of Eros) 三六三
 思惟 一七—八、三—八、四—七、六—三、八—二、一五—一、三〇—三、三七—八、一—四
 思惟の限界 四三、五二、四—八、二
 思惟の對象 四〇、四七—五〇、一四三
 詩篇 一六三、一九〇、一三四
 「神現」 二九一
 信心 三三
 「信心銘」 五六、一八六、三三七
 神格化 二六七
 信仰 二六—九、一六—二、四—五

52

信仰の生活	四三六	象徴	九一—一〇三、二九五
「信王銘」	一八七、三三七	贖罪	四三、四四〇
眞如	一〇一、一三二	證明	三二、二七、一〇一
神祕	二八、一六三、一九四、四四三	主知主義	五三、三三七
神祕道	一六六	主義	五五
神祕神學	七七	宗教藝術	一〇二
親鸞	三三、四〇、四三〇	宗教的生活	一七一
神性	一三、一八九—九〇、二四九、二五三	宗教的眞理	一八
神聖	二八—九	宗教哲學	五、六、一〇九、一一八
「知られざる神」	六四、六七、三八	シュライエルマツヘル (Schleiermacher)	三三
自然	二六—七〇、七六—九、二六一—	「出埃及記」	一三一
自然主義	二、二八四、六六—三三、三七	Skepticism 懐疑論を見よ	
子思	二六	「即」相即を見よ	
私慾	一八八	ソクラテス (Socrates)	四一、四三、三三
	六三、八三—九一	ソロモン (Solomon)	四二

存在	三三〇—三三三、三七三	manica)	八六、二一〇
「創生記」	三四一	テレザ (Teresa)	一一三
莊子	五六、一八五	テルトゥリアヌス (Tertullianus)	二二
相即	一七—一八〇、三六六	Theophany 神現を見よ	
創造	二九二	徳山	一四三、一四四
スピノザ (Spinoza)	五、一三〇、三六九	トムソン (Thompson, Francis)	四二
救ひ 救済を見よ		罪	八五、八七、三三三、四二七—八、四二八—九
		罪への意識	八八—九
T		U	
立場	一一〇—一二五	「内なる光」	三三
大我	三三五	ウパニシャット (Upanishad)	七四、一九一
多神論	三〇五	疑ひ	二四—三二、三九—四三
タウレル (Tauler)	一七、三三、三三		
眞信尼	四一〇、四三三	V	
天國	四三—五	“Via Negativa”	三
テオロギア・ゲルマニカ (Theologia Ger-			

50
21

50
21



W

Whitman ホイットマンを見よ

Y

一九〇、三〇一、三〇九、三六六

ヨハネ

慾 私慾を見よ

ヨセフ

「幽」

三四五

維摩

一六九

唯一

四、二〇、二二五、二八五、二九、三〇七

救し(容赦)

四二七—四三〇

Z

全一

禪定

禪家(禪者、禪僧)

「禪林類聚」

屬性

三〇八—二四

九

九二、三三、三六

四一〇

一四一—五

同じ著者によりて

- | | | |
|---------|----------|---------|
| 宗教とその眞理 | (一九一九年刊) | 定價貳圓七拾錢 |
| 宗教的奇蹟 | (一九二一年刊) | 送料拾八錢 |
| 宗教の理解 | (一九二二年刊) | 定價貳圓 |
| ブレークの言葉 | (一九二二年刊) | 送料拾五錢 |
| 朝鮮とその藝術 | (一九二二年刊) | 定價四圓 |
| | (挿繪卅六葉) | 送料貳拾壹錢 |
| | (一九二三年刊) | 定價貳圓八拾錢 |
| | (挿繪二十四葉) | 送料拾九錢 |

以上

叢文閣出版

(東京牛込神樂町二ノ十一)
振替東京四二八八九番

神に就て	
定價貳圓七拾錢	
著者	柳宗悦
發行者	荒木利一 郎
印刷所	株式會社 大阪毎日新聞社 大阪府豊能郡箕面村平尾七三七 大阪市北區堂島裏町二丁目三六
發行所	大阪市 大阪毎日新聞社 堂島 振替大阪四五〇番
同	東京市 東京毎日新聞社 丸ノ内 振替東京二八〇〇番

50
21

50
21

12500
ね

二 回	毎 月	週 刊	週 刊	日 刊	日 刊	日 刊	日 刊	大 阪 毎 日 新 聞 社 の 事 業
雜 誌	財 政 經 濟	點 字	サ ン デ ー	英 文	英 文	東 京	大 阪	
	エ コ ノ ミ ス ト	「 大 阪 毎 日 」	「 毎 日 」	「 東 京 毎 日 」	「 大 阪 毎 日 」	「 新 聞 」	「 新 聞 」	

504

218

